【事例紹介】

一般財団法人ハンガリー医科大学事務局（ＨＭＵ）の活動と実績

-知られざる歴史と戦い-

History and Achievements of HMU: The Unknown Long Battle Behind

一般財団法人ハンガリー医科大学事務局専務理事　**石倉　秀哉**

ISHIKURA Hideya

(Foundation of Hungarian Medical Universities, Japan)

キーワード：海外の医学部、医学部留学、海外の大学

今回、JASSO より「ハンガリー医科大学事務局（HMU）の活動と実績について」書いてほしいと執筆依頼を頂いた。正直困ったが、これについて、知っている者は他になく、これも何かの縁と思い、また海外への医学部の道を開いた者としての責務だとも思い、この場で今までの経緯を留めてみたいと思うようになった。と、言いつつ、実は真実を述べるのはなかなかに難しい。色々な人への配慮があるからである。

1.　なぜこのようなプログラムを始めようと思ったのか？

まずここからスタートしなければ真実を語ることは出来ない。

このことについては、2014.4.21 のアエラ「ハンガリーの大学で日本の医師めざす。」[1]に一部掲載されているので、出来たら、それも合わせてご覧いただきたい。

これは、私の考えの根底にあるものであるのだが、私には、従来から日本の受験で医学部生を選抜することについて、そもそも納得がいかなかった。医師という職業は、「単に高校の学業だけでは選抜できない、それでは、医師に適正な人物を選ぶことにはならない。」と思っていた。数学や物理などの能力の高さだけで医師の適性が図れるのだろうか？医師には、知的能力の高さが担保されていなけれ

[1]「ハンガリーの大学で日本の医師をめざす」AERA 2014.04.21
https://www.hungarymedical.org/publicity/page/2/#234

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

ばならないのは勿論であるが、人間を相手にする仕事であるからには、その人の持つ人間性・人間力が不可欠であろう。また、この人間力というのは、後天的に身につくものも多い。

もう一つの問題は、国立大学の入試に失敗した者が、私立の医学部に行けるのかという問題である。多くの国立大学受験者は、私立の医学部は受験しない。受験したとしても、慶応等のごく一部の私立大学医学部ぐらいのものである。理由は経済的な問題である。通常の私立の医学部は、平均的な家庭では財政的に手が出ない。出たとしても、受験生本人は「そんなことは親に頼めない。」と思って諦めているし、自分の同レベルの同級生の仲間と比べて、私立の医学部なんて自尊心が許さないとも思っている。

例えば、京セラや第二電々の創業者稲盛和夫さんがそうである。稲盛さんはもともと医学部志望で、高３の 18 歳の時に、大阪大学医学部を受験したが失敗した。それで、鹿児島大学の工学部に進学された。あの偉大な経営者が、医師には向かなかったのだろうか？そうは思わない。稲盛さんみたいな人は、医師になっても後世に残る偉大な人物になっていたであろうと思う。こういう稲盛さんのような人材を取りそこなっていること自体が、今の医学部の選抜方式の欠陥であろう。

土台、同じ職業に就くのに、なぜ一方（国立）が年間６０万円なのに対し、一方（私立）は年間６００万円なのか？多分、入学一時金や施設費、その他の費用を入れれば、２０～３０倍の違いになるのではないだろうか？それを唯々諾々と出せるのは、開業医の子息女ぐらいであろう。

多くの人々は、教育の機会均等を疑わないが、誰もこのことを議論しようともしない。人の命を扱う、時として、滅私の精神あるいは行為を求められる医師が、親が金持ちでなければなれないというのは大いなる欺瞞である。

故に、第 3 の道（海外の医学校）を模索し、その可能性を見出そうとしたのである。

2. 2004 年～2005 年にかけての９か国の医学校の歴訪・行脚

筆者は 2000 年と 2001 年に癌で 2 回入院生活を余儀なくされた。が、体力の回復を待って、2004 年に主治医から海外出張の許可が出たのを機に海外医学校の歴訪に出かけた。最初に出かけたのが、カリブ海である。アメリカでも Medical School は難関である。アメリカは、4 年制大学を出た後に Medical School に行くので制度は違うが、日本の医学部よりも格段にむつかしい。それで、アメリカ人でも国内の医学校に進学できない者の中には、カリブ海に向かう者もいる。

実はカリブ海には、十数校の医科大学（Medical School）があるのであるが、筆者が訪問したのは、その No1 と No2 だった。その他のものは、ほぼ怪しげなものだった。

まず 2004 年に、カリブ海のグレナダ島のセントジョージ医科大学とドミニカ（ドミニカ共和国ではない）のロス医科大学を訪問した。グレナダは、カカオが主産業で人口 10 万人の小さな島である。ハ

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

リケーンの通り道で毎回被害は甚大であるようだった。6 か月前にあったハリケーンの被害がまだ補修されていなく、学生寮が壊れたままなので、一部ホテルの部屋を学生寮に使用していた。しかし、そのカリブに浮かぶ白い校舎は、青い海と熱い太陽の日を受けて美しかった。セントジョージ医科大学は、既に当時で 20 年ぐらいの歴史があったと思う。

ドミニカはたかだか人口 5 万人の小さな島で、エコツアーが主産業で国の GDP の半分を大学が占めているといった、驚くような別世界であった。飛行場は木造建てで、大学までタクシーで行ったが、40 分ぐらい細い山道を延々と走り、途中で大丈夫かと心細くなってきたころに、ようやく頂きに白い建物が見えてきた。それがロス医科大学だった。エコツアーが主産業といっても、ホテルも満足になかったのではないかと思う。我々は、ほとんど何の設備もない大学の寮に泊めてもらった。学長は元ヴァージニア州の医科大学教授であった。他の教授たちも、世界中から集まってきていたと思う。住民はほぼアフリカ系の人である。

そこで、私は悟った。ここカリブ海の医学校では日本人の道はない。下記のような問題点がある。

１、 授業料が高いし、大学の 4 年間をまずアメリカで勉強してからでなくては進めない。

２、 隔離されたこの環境で、勉学に励むのは日本人学生には無理である。

しかし、この仕組みはアメリカ人にはいいのである。何故かというと、アメリカ人は学期毎にアメリカの家に帰れるのである。しかも、この島で勉強するのは 2 年間の基礎医学（Basic medicine）の時だけである。後半の臨床医学（Clinical medicine）の 2 年間は、提携先のニューヨークかカリフォルニアの病院で勉強すればいいのである。アメリカ人には好都合なシステムだが、日本人には無理である。

そこで、私は目をヨーロッパに向けた。日本に戻ってしばらく調査してから、ヨーロッパの医学部を歴訪した。ウクライナ、ポーランド、チェコ、スロバキア、ハンガリー、ルーマニア、アイルランド、7 か国の医学部を廻った。どこも東欧の黎明期で、日本人の訪問が珍しく、私を大歓迎してくれた。これらの医学部で様々な出会いがあり、様々な人間模様があった。ここでは紙面が足りなくなるので詳細は省くが、スロバキアのコメニュース大学もチェコのパラツキー大学も筆者が契約した。どの大学もそれまでは日本人を受け入れるというアイデアはなかった。

これで、私は海外の医学校とはいかなるものかという概略をつかんだ。カリブ海は駄目だが、ヨーロッパは行ける、大丈夫だという確信めいたものが出てきた。授業料は安いし、彼らは日本人に好意的である。しかし、問題は当時の厚労省であった。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

3. なぜ、2005 年まで、海外の医学部に行けなかったのか？

海外の医学校を卒業した場合、あるいは医師になった場合、どのように厚労省で取り扱われるのか？そのまま日本でも医師として働けるのか？あるいは、日本でも新たに医師免許を取らなければいけないのか？もちろん、そのまま医師として働けるわけではない。医師免許を取らなければならないのである。

まず、その国家試験を受けられるかどうかの申請をしなければいけない。そして、その受験資格を得なければいけない。その場合、1. 資格なし、2. 予備試験受験資格あり、3. 本試験受験資格あり、と 3 段階に分類される。その認定される基準の比較表を見ていただきたい。この表の①～⑩を全て満たしていなければ、医師国家試験の本試験の受験資格を得られない。要は、厚労省は、外国の医学校が日本の医学部と同等かどうかを審査しているのである。仮に予備試験の認定を受けたとしても、本試験にたどり着くまでに 2 年を要するのである。その上さらに、たどり着く人の割合が、当時 20%弱だった。今でも変わらないと思われる。

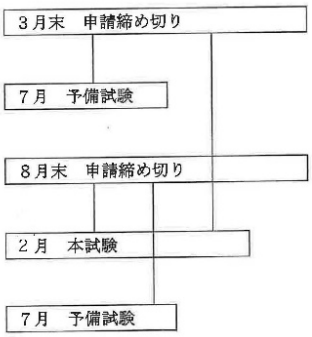
医師・歯科医師国家試験の受験資格について

外国の医（歯）科大学を卒業した者、または免許を取得した者が、日本で医（歯科）師の資格を取得するためには、まず、医（歯科医）師国家試験の受験資格を厚生労働大臣から認定される必要があります。

認定申請者の主な要件（この他にも要件あり）
- 外国籍の方については、「在留活動に制限のない在留資格」を有すること。
  （例えば、永住者、定住者、永住者の配偶者等、日本人の配偶者等）
- 医（歯）科大学において、5 年以上の一貫した西洋医学を修業していること。
- 日本の中・高校を卒業していなければ、日本語能力試験 1 級相当以上の資格を有すること。

これらの要件を満たしている方について、書類申請を受け付けており、審査の結果として次の 3 つのケースがあります。
1，医（歯科医）師国家試験の受験資格を認定される場合。
2，医（歯科医）師国家試験予備試験の受験資格を認定される場合。
3，その両方が認められない場合。

書類申請の締め切りについて



予備試験
第 1 部試験
第 2 部筆記試験
第 2 部実地試験
1 年以上の実地修練
本　試　験

＜参考＞

外国医学校卒業者等の
医師国家試験受験資格認定基準と予備試験受験資格認定基準の比較

		医師国家試験受験資格認定	医師予備試験受験資格認定
	根拠法令	「医師法」第 11 条第 3 号	「医師法」第 12 条
1	外国医学校の修業年数		
	医学校の入学資格	高等学校卒業以上 （修業年数 12 年以上）	高等学校卒業以上 （修業年数 12 年以上）
	医学校の教育年限	6 年以上 進学課程　2 年以上 専門課程　4 年以上	5 年以上 専門課程　4 年以上 （インターン期間も配慮する）
	医学校卒業までの修業年限	18 年以上	17 年以上
2	専門科目の授業時間	4,500 時間以上で、かつ一貫した教育を受けていること	3,500 時間以上で、かつ一貫した教育を受けていること
3	医学校卒業からの年数	10 年以内（但し、医学教育又は医業に従事している期間は除く）	10 年以内（但し、医学教育又は医業に従事している期間は除く）
4	専門科目の成績	良好であること	良好であること
5	教育環境	大学付属病院の状況、教員数等が日本の大学とほぼ等しいと認められること	大学付属病院の状況、教員数等が日本の大学とほぼ等しいと認められること
6	当該国の政府の判断	WHO の Directory of Medical Schools に原則報告されていること	WHO の Directory of Medical Schools に原則報告されていること
7	医学校卒業後、当該国の医師免許取得の有無	取得していること	取得していなくてもよい
8	当該国免許を取得する場合の国家試験制度	制度が確立していること	制度が確立していなくてもよい
9	日本語能力	日本の中学校及び高等学校を卒業していない者については、日本語能力試験 1 級（相当）の認定を受けていること	日本の中学校及び高等学校を卒業していない者については、日本語能力試験 1 級（相当）の認定を受けていること
10	日本語診療能力調査	別に定める評価以上であること	
	認　定	上記の全てを満たしていること	上記の全てを満たしていること

しかもこれらの必要書類を、外国医学校を卒業した後に提出して、厚労省の審査を仰がなければならない。想像をしてもらいたい。将来国家試験を受けられるかどうかも分からないのに、外国の医学校に入学しようとする人がいるだろうか？何の保証もないのに、外国の医学部で 6 年あるいは 7 年勉強しそして卒業して日本に帰国した後、必要書類を厚労省に提出し審査をしてもらった結果、受験資

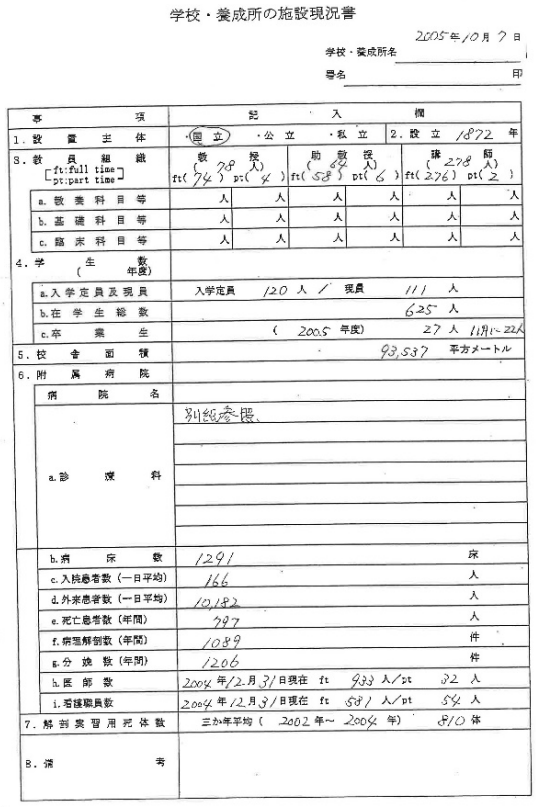
独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

格なしとなったらどうするのか？そんなことをする勇気のある人がいるだろうか？審査後に、国家試験の受験資格はないと言われたら、医学部の６年～７年が無駄になるだけではない。人生そのものが無駄になってしまう。取り返しのつかない人生となってしまうであろう。

予備試験に回されればまだいいが、受験資格はないと言われたらどうするのか？よしんば、予備試験に回されたとして、2 年かけても本試験にたどり着けなかったら、どうするのか？その道のりたるや、想像するだに気の遠くなる話である。

本試験に認定されるチェック項目は全部で 10 項目ある。認定を受けるには、下記 10 項目の法令根拠を示さなければいけない。

①外国医学校の修業年数（医学校の入学資格、医学校の教育年限、医学校卒業までの修業年限）
②専門課程の授業時間（4500 時間以上で、かつ一貫した教育を受けているかどうか）
③医学校卒業からの年数（10 年以内）
④専門科目の成績（良好であること）
⑤教育環境（大学付属病院の状況、教員数が日本の大学とほぼ等しいと認められること）
⑥当該国の政府の判断（WHO の Directory of Medical School に原則報告されていること）
⑦当該国の医師免許取得の有無
⑧当該国免許を取得する場合の国家試験制度（制度が確立していること）
⑨日本語能力（日本の中学、高校を卒業していないものについては、日本語能力試験１級の認定を受けていること）
⑩日本語診療能力調査（別に定める評価以上であること）


学校・養成所の施設現況書

2005年10月7日

学校・養成所名

署名　　印

事項	記入欄					
1. 設置主体	・国立　・公立　・私立			2. 設立 1872 年		
3. 教員組織 [ft:full time pt:part time]	教授 (78人) ft(74) pt(4)		助教授 (82人) ft(58) pt(6)		講師 (278人) ft(276) pt(2)	
a. 教養科目等	人	人	人	人	人	人
b. 基礎科目等	人	人	人	人	人	人
c. 臨床科目等	人	人	人	人	人	人
4. 学生数 (　年度)						
a. 入学定員及現員	入学定員 120 人 / 現員 111 人					
b. 在学生総数	625 人					
c. 卒業生	(2005 年度) 27 人 11月に22人					
5. 校舎面積	93,537 平方メートル					
6. 附属病院						
病院名						
a. 診療科	別紙参照					
b. 病床数	1291 床					
c. 入院患者数（一日平均）	166 人					
d. 外来患者数（一日平均）	10,182 人					
e. 死亡患者数（年間）	787 人					
f. 病理解剖数（年間）	1089 件					
g. 分娩数（年間）	1206 件					
h. 医師数	2005年12月31日現在 ft 933 人/pt 32 人					
i. 看護職員数	2005年12月31日現在 ft 587 人/pt 54 人					
7. 解剖実習用死体数	三か年平均 (2002 年～ 2005 年) 810 体					
8. 備考						

これら全てを大学受験前に調べ上げることは、不可能である。まして、それが日本の医学部と同等であるかどうかを証明することは日本の医学部の教授であろうと無理であろう。⑤の「教育環境が日本の大学と等しい。」を証明するためには、「学校・養成所施設現況書」を示す必要がある。この中で、「5. 校舎面積」や「6. e. 死亡患者数（年間）」「6. f. 病理解剖数（年間）」を記載しなければいけない。これらをどうやって調べるのであろうか？現地の教授であっても事は簡単ではなかろう。医学部や附属病院のことを総合的に把握している者でなければ無理である。**従って、海外の医学部にチャレンジ（受験）しようという者は、当時皆無で**

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

あったのである。2005 年に筆者が厚労省に書類を持ち込むまでは、無謀な夢物語であった。

しかし、筆者は、道はあると確信していた。何故か？これら 10 項目のうち、①②③⑤⑥⑧の６項目は事前に厚労省に審査してもらうことは可能な項目である。その他の④⑦⑨⑩は個々人の条件によって異なるが、一つずつつぶしていくことは可能である。

まず、④の専門科目の成績（良好であること）
であるが、これは外国医学校に行こうと思う学生にとって最も頭を抱える難問・条件であった。いったい、

⑴　良好な成績とは何点以上のことをいうのか？
⑵　外国の医学校に行ったとして、果たして自分にその良好な成績を取れるのか？
⑶　これら上記の２点を送り出す側の保護者や高校の先生に、入学前に説明・説得できるのか？

しかしながら、筆者の考えはこうであった。

⑴ 良好な成績？こんなことは､果たして厚労省が判断できるのか？世界の医学部には偏差値が付いているわけではない。いったい何が良好と言えるのか？一律、良好な成績とは 5 段階の 2 以上とか 3 以上とか、決めていいのであろうか？まず、その線引きが出来ないであろう。また、アフリカのジンバブエの医学校の 3 とハーバード大学の医学部の 3 は、どっちが上なのか？同じなのか？あるいは、格差があるのか？そういう判断は、日本の厚労省は出来るのか？出来るとすれば､それは WHO の範疇ではないのか？国際問題になってしまうのでないのか？というわけで、この条項は問題になりうるはずがないと判断した。

⑵ 従って、自分にその良好な成績が取れるのかどうかを気にする必要はなく、落第しても卒業すればいいだけのことである。

というのが、筆者の当時の推論であった。しかし、あくまでも推論であったし、また、良好な成績を取れないと予備試験に回されるかもしれないという恐怖が、絶えずハンガリー医学部に学ぶ日本人学生にはあった。が、筆者は黙っていた。「それは、そうじゃない、心配するな」とは在学生には言わなかった。何故なら、その恐怖心で、勉強に励むだろうと思ったからである。それを利用させてもらった。

後日、この推論が正しいことが証明された。2016 年に厚労省はこの条件を削除した。意味のない条項だったのである。

次に、⑦当該国の医師免許取得の有無であるが、これがまた難問であった。これは誰に聞けばいいのか？当時の大使館も全く協力的ではなかった。筆者が何をしようとしているのか、理解してもらえ

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

なかったのであろう。それもまた当然といえば当然であった。「チェコ・ハンガリーの医学部を日本に蘇らせるのです。そのために必要です。」と言ってみたところで、そんなことは誰も想像すらしていないし、誰も理解できない。だが、ハンガリーの医学部関係者の中に理解者がいて、医師免許に関する条文を教えてくれたのである。

⑨日本語能力（日本の中学、高校を卒業していないものについては、日本語能力試験１級の認定を受けていること）
これについては、在学中にこの試験を受ければいいだけの話である。日本人には難しい問題ではない。

⑩日本語診療能力調査（別に定める評価以上であること）
これについては、やはり当時非常に不安要素ではあったが、これは医師になるものとして、当然身に付けておくべきものであろうと、前向きにとらえていた。実際、後日これが問題になることはなかった。

以上のように、こうに違いないという推論は可能であった。ということで、筆者はハンガリー３大学とチェコの１大学と共同で６項目の書類の作成に取り掛かった。これに半年ぐらいかかったが、とにかく出来上がり、厚労省に提出し審査してもらった。その結果、「ハンガリーの医学部は問題ない」とコメントをもらい、晴れてこのプログラムを開始することになった訳である。当時は、小泉純一郎政権であり、竹中大臣が、規制緩和の推進に大ナタを振るっていた。天の時であったと言っていい。

「天の時、地の利、人の和」という言葉があるが、まさしくこの時がそうであったと思う。実際、その後、続々と想像もしない地位や力のある人たちが、支援協力をしてくれるようになって行った。当初は、徒手空拳であったが、様々な人の力添えを得ることが出来た。今は亡き北島政樹先生（元国際医療福祉大学学長）もその一人である。当時は、日・ハンガリー外科学会の会長であり、大変お世話になった。

従って、日本人にとって存在しないも同然だったハンガリーとチェコの医学部をこの世に蘇らせたわけである。ハンガリーとチェコだけではない。その他の海外医学校の可能性も切り開いたのである。いわば、パンドラの箱を開けたと言っても過言ではない。

4.　なぜ、事務局を設立しなければいけなかったのか？

しかし、完全にパンドラの箱を開けたというには早かった。何故なら、その他の不安要素がいくつかあったからである。例えば、ハンガリーの医学部の英語のプログラムでは、3 年生の終了時にハンガリー語のテストがあり、それにパスしないと 4 年生に進級できないというルールがあった。これに果

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

たして日本人学生はパスできるのか？はたまた、順調に 1 年から 2 年、2 年から 3 年、3 年から 4 年へと、6 年生までスムーズに進級していけるのか？そして、卒業できるのか？どんなハードル（障害）が待ち受けているかわからない。要は、2006 年に送り出した 1 期生が卒業して帰ってこないことには、安心できなかったのである。

また、厚労省は最終的にハンガリーの卒業生に国家試験（本試験）の許可を与えるのか？最終的に、げたを履くまで分からなかった。確信はあったが、安心ではなかった。「今までの出願・入学実績」を見ていただきたい。2006 年に送り出した 1 期生が、2013 年 6 月に 7 名卒業して 6 名日本に帰って来た。そして、国家試験本試験に認定され、4 名国家試験に合格した。これで、晴れてすべてが証明されたと言ってもいい。

今までの出願・入学実績

	出願	本コース	予備コース	合計
2006年1期生	35	2	21	23
2007年2期生	86	2	44	46
2008年3期生	92	2	35	37
2009年4期生	84	3	42	45
2010年5期生	64	1	26	27
2011年6期生	65	4	26	30
2012年7期生	57	5	31	36
2013年8期生	50	1	28	29
2014年9期生	81	10	43	53
2015年10期生	165	12	60	72
2016年11期生	171	10(12)	67	77
2017年12期生	181	9(10)	59	68
2018年13期生	265	12(14)	74	86
2019年14期生	322	11(13)	75	86
2020年15期生	302	10(14)	74	84
合計	2020	94	705	799

203% INCREASE

要するに、このプログラムの成否を知るためには、7 年間の歳月を要したのである。長い忍耐の歴史が必要であった。多くの不安と心配、そして費用を要した。2006 年 2007 年 2008 年と順調に応募者が増えた。それだけ、医学部熱が高かったということである。医学部熱は今に始まったわけではない。従って、最初の 3 年間は物珍しさと共に、新たな道（選択肢）ということで、志願者が集まった。

ところが、その後、減少に転じた。それは、ネット上での誹謗中傷の雨あられがあったからである。誹謗中傷は概ね次のようなものである。

１、　ハンガリーの医学部なんて、旧共産圏の時代遅れの前近代的な低レベルのもので、勉強するに値しない。

２、　また、そんな所に行ったところで、卒業は出来ないだろう。

３、　そもそも、厚労省は国家試験の受験を認めないであろう。

４、　よって、これは詐欺である。

といった具合である。

まさに言いたい放題。ネットによる被害は今でこそ法律で守られる仕組みが出来つつあるが、当時はネットの黎明期でひどかった。第 1 期生が卒業してくる 2013 年までの約 7 年間は、隠忍自重の時期

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

で、年々応募者が減っていった。しかし、その間にあまりにひどい誹謗中傷者に対し、訴訟を起こした。2 年を要したが、もちろん勝訴だった。

それにしても臥薪嘗胆の時期であったが、そこで辞めるわけにいかなかった。どうしても１期生をまず卒業させなければいけなかった。送っただけで終わっていたら、多くの学生は討ち死にして帰ってきていたであろう。当時は、ハンガリーは、まだ旧共産圏時代の闇が残る、暗い国であった。イメージは、とても遅れていて暗かった。それに抗して行ったわけであるから、１期生は果敢であった。また、夢も持っていたと言っていいであろう。

１期生を送るだけではなく、その後に続く学生たちも毎年送り続けなければ、このプログラムは終わってしまうのは、目に見えていた。あらゆるネガティブな要素に打ち勝っていかなければいけなかった。

実は昔 4、50 年前、アメリカでも海外の医学部に行くことがはやった形跡がある。アメリカ人にとっても、アメリカの Medical School は難関である。日本人には、ほとんど無理である。日本からアメリカの大学に留学した学生の中で、Medical School に行けず、ハンガリーやメキシコ、ドミニカ共和国等の医学部に渡った人たちが十数人いる。結果はどうだったか。ほぼすべて討ち死にに終わってしまった。従って、著者が、最初の１～2 年、学生を送っただけでこのプログラムを取りやめていたら、メキシコやドミニカ共和国と同じ悲惨な結果になっていたであろう。

こういう時期をどう過ごすのか？公益負担か受益者負担かという議論があるが、何処からも援助がない以上、受益者負担で行くしかない。要は、医師という一生の資格を得るわけであるから、それを手に入れる学生（受益者）自身が負担するしかない。そこで、**事務局を設立して**バックアップ体制を整え、学生たちの支援応援をすることにした。各地にスタディルームを作り、コーディネーターを置いた。各スタディルームで、チューター（家庭教師）も 10 人ぐらい来てもらうようにした。

つまり、これは学生たちと事務局が手を携えて作り上げてきたプログラムである。このように、自分たちが手作りで開拓した道を、誰にでも（受益者負担をしない人にも）使わせるわけにいかない。勝手に横から入ろうとする人を入れるわけにいかない。ただ乗りは出来ない。従って、大学とは Exclusive な独占契約を結んだ。至極当然の話である。

5.　何故、Roger Downer を理事に選んだのか？

当初の一般財団法人ハンガリー医科大学事務局の組織図を見ていただきたい。

上から 2 番目に、ロジャー・ドウナー先生が理事会メンバーに入っている。元アイルランドのリムリック大学学長であり、永年名誉学長である。また、欧州大学協会会員である。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

なぜ、彼に HMU の理事になってもらったのか？彼は、アイルランドで初めて 4 年制のアメリカ型の Medical School をリムリック大学に作った。医学教育に造詣も深く、欧州大学協会会員でもあり、当時（EU 第 5 次拡大期が 2004 年）、東欧の医学部を調査及びレベルアップのために巡回していた。

それで、将来 1 期生が卒業するときに、万が一、厚労省がハンガリーの医学部を認定しないというような、想定外の判断・措置をした場合は、EU 側から日本に抗議してもらおうと考えていたのである。その為に、ロジャー・ドウナー先生は必要であった。

一般財団法人ハンガリー医科大学事務局
組織紹介

理事長
川田 志明
■慶應大学医学部外科名誉教授 ■山中湖クリニック理事長
■元東海大学医学部部長

理事
ロジャー・ドウナー
■リムリック大学(アイルランド) 永年名誉学長
■欧州大学協会会員

理事
北村 聖
■東京大学医学教育国際協力研究センター教授
■東京大学医学部付属病院総合臨床研修センター長 ■日本医学教育学会 理事
■厚生労働省新卒後臨床研修制度ワーキング委員

理事
ヨゼフ・シャンドール
■センメルワイス大学医学部外科教授
■日・ハンガリー外科学会ハンガリー会長

理事
岩尾 總一郎
■慶應大学医学部客員教授 ■元厚生労働省医政局長
■元国際医療福祉大学副学長 ■元 WHO 健康開発総合研究センター長

理事
アッティラ・ヤナイ
■デブレツエン大学生物物理学・細胞生物学准教授、
医学部英語プログラムディレクター

理事
石倉 秀哉
■非営利教育財団 SAF 日本代表
■医学生支援協会理事長

評議員
ゾルタン・カラディ
■ペーチ大学医学部教授、生理学部長

評議員
黒須 譲
■元 UCLA(カリフォルニア大学ロサンゼルス校) 麻酔科助教授
■元 Tokyo MidTown Clinic 副院長
■プライマリーケア東京クリニック院長

評議員
宇田 理夫
■教育新聞社顧問、元教育新聞社専務取締役

監事
中村 昌典
■弁護士
■京都大学卒

顧問
ジョン・ベルチャー
■非営利教育財団 SAF USA 理事長
■ウエストミンスター大学(イギリス) 元副学長

HMU ハンガリー医科大学事務局
TEL:03-5321-6771 E-Mail:info@hungarymedical.org
http://www.hungarymedical.org
2018.09

6. 2013 年の前と後

「今までの出願・入学実績」を見ていただきたい。2013 年以前と以後とではその実績は全く違う。2008 年～2013 年まではじり貧であったが、2014 年以降は飛躍的に出願者（応募者）が増えた。前述した通りであるが、2013 年 7 月に第 1 期生が卒業して日本に帰って来たことが何よりも大きかった。彼らは、生きた証拠であり、何よりの事実証明である。筆者がいくら説明会等で、ハンガリーの医学部は医師になるための第 3 の道であると説いたところで、あくまでも絵空事の類としか聞いてもらえなかったのであろう。論より証拠、実際に 6 人中 4 人が、2014 年 2 月の国家試験に合格した。これは、皆が想像だにしなかったことであろう。筆者を信じて付いてきてくれた 1 期生と保護者に感謝である。

そして、その翌年（2014 年）には、13 人が卒業して日本に帰って来た。前年の国試不合格者 2 名と合わせて、15 人が国試を受験し、13 人が見事に合格し医師になった。これで、世間の見る目は完全に違ったものになって来たと思う。ハンガリー医学部への応募者も一挙に倍以上になった。そして、昨今の応募者は 300 人を超えている。想定される定員の 3 倍強の応募である。倍率は 3 倍強であるが、事務局審査委員会は、決して倍率に拘っているわけではない。審査委員は、広く志ある学生に門戸を広げたいと思っている。要は、志があり、一定の能力があり、努力研鑽をつむことが出来る者を入学させたと思っている。ハンガリーで、英語で医学を修得することは、大きな困難を伴うからである。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

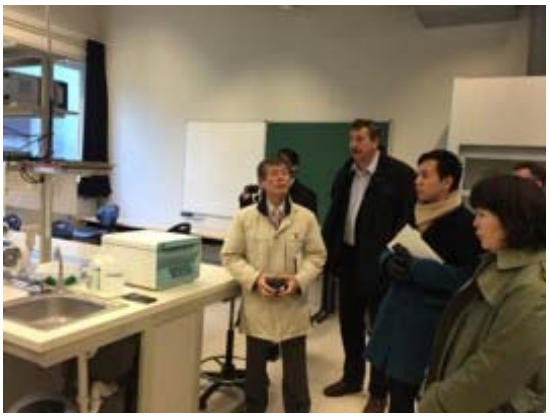
人の選抜は難しく容易ではない。「化学や生物などの科目の点数だけでは選抜できない。その人の人間性を見たい。」と、審査委員は思っている。幸いなことに、プログラムの立ち上げ当初は、応募者が少なく十分な人選もままならなかったが、ここ最近は 3 倍強の応募者があるので、好ましい人物を入学させることが出来つつある。

7. 厚生労働省のハンガリー医学部調査（2016 年 11 月）

「今までの卒業生の実績」を見ていただきたい。2013 年 6 名、2014 年 13 名、2015 年 12 名、2016 年 16 名と厚労省に国試受験のための申請に行くものが年々増えてきたのである。となれば、当局の厚労省としては、ハンガリーの医学部できちんとした教育が行われているのかどうか気になるのも当然であろうし、看過できない、きちんと調査しなければいけないと思うのも当然であろう。

そこで、2016 年 11 月に調査視察団がハンガリーの医学部に派遣された。

2016 年 11 月 11 日センメルワイス大学訪問



2016 年 11 月 14 日デブレツエン大学訪問

奈良信雄 先生（医学教育評価機構常勤理事、東京医科歯科大学名誉教授）を中心として厚労省側から 3 名、HMU 側から 2 名の調査団がハンガリーの医学部 2 校（センメルワイス大学、デブレツエン大学）を訪問・調査した。解剖学や生理学、病態生理学等多くの授業を見せてもらい、ラボや研究室も

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

訪問した。また、現地の先生方を交えての質疑応答や会議・討論も重ね、互いの理解を深めた。

実に有意義な視察訪問であった。単に学術的な調査の意味合いだけでなく、調査団にとっては、ハンガリーの薫り高い文化と長い歴史に裏付けられた医学教育であることの認識が得られたのではないかと思う。

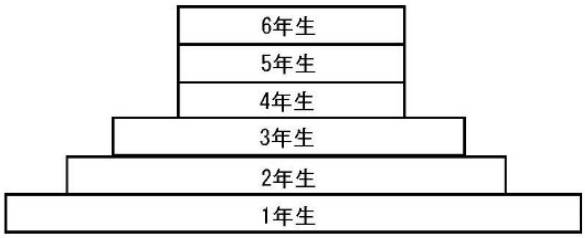
また、後日、奈良先生によって、視察調査の結果報告書「平成 28 年度海外医学部における教育カリキュラム等に関する調査及び分析」が、まとめられた。その内容を一言でいえば、「ハンガリーの医学教育は素晴らしい。その要因は 2 つあって、十分な教育体制（豊富な教授陣）と高い基礎医学教育である。」ということである。

また、奈良先生は、東京医科歯科大学同窓会報に次のように書いている。

「受け入れる側の当局としては、彼らがハンガリーでしっかりとした教育を受けているかどうか、気にするのも宜なるかなである。実際にハンガリーの医学部をほぼ 1 週間みっちり視察した結果は、風評を完全に覆すものだった。今やアメリカを始め、世界の医学教育の主流は、講義による授業スタイルから少人数のチュートリアル教育に転換している。日本の医学部の多くがこの潮流に取り残されている。しかし、恐るべし、ハンガリー医学部。医学部には日本よりもはるかに多くの教員が所属し、学生 7 名のグループに教員が 1 名の割合で配備され、指導していた。しかも、高学年の学生一人が指導に加わり、これぞ典型的な屋根瓦方式である。1 学年が 250 名前後と多いにもかかわらず立派に成立した教育技法で、学生の満足度は高い。生理学のチュートリアル教育に立ち会ったが、レベルは相当に高かった。」

8. 外国医学校（医師になるための第３の道）が、どのように国内の医学部と違うのか？

日本（図１）



ハンガリー（図2）

日本では、上図１のように、入学した学生がよほどのことがない限り、最終学年まで持ち上がるというのが日本のスタイルである。さすがに、医学部だけは、入学した人が皆な仲良く卒業することはないだろうが、それでも足並みそろえてというのが、日本であろう。

ところが、ハンガリーでの入学から卒業までのイメージは上図２に近い。要するに、ある程度数多

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

く入れて、ふるいに掛けていく方式である。要は、甘さの残る者、人間的に未熟の者が淘汰されていく。医学部で生き残るには、一等の頭脳の持ち主である必要はなく、粘り強く努力し頑張れる者であることが重要である。そういう人材が、生き残っていく。人間的に過不足なく、他者と上手くやっていくことの出来る者、また、他者に対してやさしく振る舞える者、他人に対し共感できる者、他人を思いやることが出来る者が医師に相応しい。要は、Hospitality『自分主体ではなく相手を主体的に想う考えや行動』が必要なのである。これには、経験や後天的な教育も必要である。場や地位がその人間を育てる。

従って、日本方式よりもハンガリー方式の方が、断然、いい医者を育て上げることが出来ると思う。より社会に相応しい医師の選別方式であると思う。ハンガリーは予備コースも入れれば 7 年になる。解剖学や病態生理学で単位を落とせば、もう 1 年や 2 年余計にかかる。しかし、そうやって、よりいい人材を医師に育て上げていく方が、本人にとっても周りの社会にとっても幸せであろう。

9. 進級率と留年率

よく「どれくらいの人が進級するのですか？」あるいは、「どれくらいの人が留年するのですか？」という質問が来る。これは、無理からぬ質問であるともいえるし、馬鹿げた稚拙な質問であるとも言える。2013 年に 1 期生が卒業してから、昨年（2019 年）まで卒業生を輩出し続けている。2005 年当時のまだ右も左もわからない時期であれば、雲をつかむような話かもしれないし、未知のものに対する大いなる不安もあるだろうが、7 年間も卒業生を出し続け、さらに優秀な医師として全国で活躍している。

また、よく考えてみてほしい。何を勉強しに行くのであろうか？医学である。仮にこれを数学に置き換えてみれば、わかりやすいかもしれない。数学であれば、それがアメリカであろうと、日本であろうと、１＋１＝２ということを教える。同じことを教えているのであれば、日本と進級率や留年率は変わらないであろう。要は、それを学ぶ人の頭脳や耐久性の問題である。英語のほうがむしろ論理的な言語であるだけに、勉強しやすく進級しやすいであろう。

あるいは、誰も知らない異国で勉強するということが不安なのであろうか？人は見えないものに対して恐怖心を抱く。コロナパンデミックと同じである。それが、最大不安要素かもしれない。漠然とした不安感から「進級率は？留年率は？」と質問が出てくるのかもしれない。

もし、ハンガリーに進学する学生が日本の医学部に進学する学生と能力・学力ともに変わりないとすれば、進級率・留年率はほぼ同じであろう。医学部で学ぶ内容は、世界共通である。日本で学ぶこととハンガリーで学ぶことは、変わりない。**また、ハンガリーの先生が特別厳しく怖いわけでもない。ハンガリーの先生たちは優しく、日本のことが好きであり、日本人学生には好意的である。**

もし、進級率が 20%であると言ったら、海外の医学校には進学しないのであろうか？確かにそう言

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

われると、怯む気持ちもわからないではないが、それはどのようなレベルの人たちが入学するのかにかかっている。日本のセンター試験の得点率で、50～60%以下の人達だけが進学しているとすれば、それはほぼ全滅に近いかもしれない。日本の医学部でも、合格できる可能性が出てくるのは、80%以上であろう。それに対して、自分は 50～60%しかないのに、スムーズな進級率を望むとすれば、それは虫のいい話になる。日本でもハンガリーでも難しいものは難しい。

それでも、敢えて、進級率を教えてほしいという人のために言っておくが、2014 年の平均進級率は 53.8%で、2019 年は 69.3%である。この 5 年間で各段に良くなってきている。何故か？それは、2014 年以降、応募者・出願者が圧倒的に増えたからである。出願者が増えれば、意識が高く学力レベルも高い応募者が増えてくる。従って、より学力レベルの高い合格者を選ぶことができる。従って、留年するものは減ってくるという好循環になるのである。もちろん、事務局のバックアップ体制も強力に後押ししている。

事務局では、各大学のごく近隣か大学内にスタディルームを設け、チューター（家庭教師）も 10 数名ずつ配置して、学生の勉強の促進を図っている。チューター（家庭教師）も勉強のできる上級生から、実際に医学部の教鞭を取っている先生にもお願いをしている。

他の国の海外医学校では、その進級率はスロバキアでは 8 人に 1 人とも、中国では 14 人に 1 人とも聞く。これは、実際に進学した人たちからの聞き取りである。それらとハンガリーの医学部では、明らかに一線を画している。

10. 英語ができなければ、英語のプログラムでは不利になるか？

この質問もよく受ける質問のうちの一つである。この質問の答えは YES であり、NO である。これもよく考えてもらえばわかってもらえるが、

「アメリカ人やイギリス人であれば、誰でも医学部の勉強は出来るのか？あるいは、医者になれるのか？」

答えは、NO であろう。英語ができるからと言って、医学が分かるわけではない。要は、医学部の勉強が分かるかどうかである。もちろん、英語で勉強するわけであるから、英語が出来ないよりも出来たほうがいい。しかし、ネイティブ並みにできる必要はない。高校生までの英語で充分である。

1 期生で、一番勉強の出来たのは、現役でハンガリーに行った女子学生であった。18 歳まで留学や海外経験の一切ない、ごく平均的な生徒で、英語も特別優秀というわけではなかった。国立医学部を狙う上のレベルの受験生であった。英語力も受験英語であり、そこそこ受験で英語を勉強していたというレベルである。

彼女曰く、「予備コースの 1 年間で、大体英語の授業に慣れて、その後はそんなに英語でのトラブル

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

はなく、何とかついていけるようになった。」ということである。ただ、彼女は医学部に行きたかっただけあって、生物や化学に対する理解や知識は他の学生よりも勝っていた。

さらに、日本人学生にとって良かったことは、英語が第 2 言語の国（ハンガリー）での医学教育であったということである。これが、イギリスやアメリカでの授業だったらどうであったかと想像すると、少しぞっとする。授業で、先生や学生がネイティブで、べらべら英語でまくしたてられたら、多分ほとんどの日本人学生は、理解できず圧倒されてしまうのではないかと思う。実は、このことが**予期せぬメリット**だったと思っている。

ハンガリーの英語のプログラムに集まってきている学生は、全世界 50～60 か国ぐらいからである。ほとんどが、英語は第 2 言語である。アメリカやイギリスからも学生は来ているが、大半はそれ以外の国からである。ノルウェーやスウェーデン等の北欧からの学生は、英語は上手いがネイティブではない。

英語の国ではない国での英語のプログラム。これがいいのである。皆にとって英語は第 2 言語である。教える側の先生にとっても母国語ではない。先生の英語自体がそんなに上手いわけではない。要は、医学的思考や情報を、英語というツールを使って伝達するのが目的である。従って、ネイティブのようにべらべらである必要はない。実は、ここで日本人学生は大いに救われてもいるし、勉強にもなっている。

11. 全国に散らばるハンガリー医学部卒業生

2013 年に 1 期生の卒業生を出して以来、昨年 2019 年までに 110 名の卒業生を輩出している。その内、106 名が帰国し 93 名が国家試験に合格して、日本で医師として働いている。

その勤務先は多岐にわたっている。東大、京大、北海道大、東北大、筑波大、東京医科歯科大、浜松医科大、名古屋大、大阪大、岡山大、広島大、鹿児島の 12 の国立大学医学部、1 つの市立医科大学、7 つの私立医科大学の附属病院、50 余りの有名市中病院と、全国の病院で働いている。

しかも、各地の病院で各々高い評価を受けている。この状況は、「広く世の中に貢献しており、非常に誇らしい」と言えるのではないだろうか。かつて、受験するときは、東大、京大や全国の国立大学医学部には手の届かなかった学生たちである。それが、今やその大学の医局に入って、有力な戦力となって働いている。

人は、17 歳や 18 歳の時の学力だけで一生は決まらない。一生勉強努力の連続であり、自己研鑽が必要である。そういう学生・医師作りに HMU は役立っているのではないかと思う。ハンガリーやチェコの医学部が特別良いと主張するつもりはない。その場を借りることによって、学生に貴重な機会を与え、自己研鑽をする時間と場所を提供している。道半ばであるが、HMU（ハンガリー医科大学事務局）、CMU（チェコ医科大学事務局）は、医師になる第 3 の道を切り開きつつある。この流れを止めず、引き続

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

き、卒業生（若き医師たち）を世に排出し続けて行きたいと思う。微力ながら、日本と世界の医療界に貢献していけるよう努力していきたい。

一般財団法人ハンガリー医科大学事務局、一般財団法人チェコ医科大学事務局のミッションは、「真に質のいい人間力のある医師を育てる。」である。

以上

卒業生の主な就職先病院

	初期研修	後期研修
1期生（2014年）	京都大学医学部附属病院 筑波大学附属病院 大阪大学医学部附属病院 東北大学病院 岡山大学病院 名古屋大学医学部附属病院 順天堂大学医学部附属順天堂医院 順天堂大学医学部附属静岡病院 東京慈恵会医科大学附属病院 聖マリアンナ医科大学病院 埼玉医科大学病院 獨協医科大学病院 筑波記念病院 静岡市立静岡病院 藤沢湘南台病院 福知山市民病院 県立広島病院 東名厚木病院 土庫病院 札幌厚生病院 手稲渓仁会病院 県立足柄上病院 尾道総合病院 赤穂市民病院 湘南鎌倉総合病院 佐野厚生総合病院 春日部中央総合病院 さいたま赤十字病院 熊谷総合病院 仙台徳洲会病院 富田林病院 大浜第一病院 京都民医連中央病院 水島協同病院 野崎徳洲会病院 国立病院機構 静岡医療センター 総合病院国保旭中央病院 釧路孝仁会記念病院 沖縄県立中部病院 埼玉協同病院 セゲド大学附属病院 ロンドン大学附属病院	東京大学医学部附属病院 筑波大学附属病院 大阪大学医学部附属病院 東北大学病院 東京医科歯科大学病院 岡山大学病院 広島大学病院 鹿児島大学病院 北海道大学病院 浜松医科大学医学部付属病院 横浜市立大学附属病院
2期生（2015年）		
3期生（2016年）		昭和大学附属東病院 聖マリアンナ医科大学病院 東京医科大学 埼玉医科大学病院
4期生（2017年）		国立国際医療研究センター病院 都立小児総合医療センター 聖路加国際病院 NTT東日本関東病院 亀田総合病院 筑波記念病院 福知山市民病院 宇治徳洲会病院 東名厚木病院 札幌厚生病院 手稲渓仁会病院 湘南鎌倉総合病院 宮城厚生協会 広島市立広島市民病院 川崎市立川崎病院 藤沢市民病院 神奈川県立こども医療センター 公立昭和病院 平和会吉田病院 淀川キリスト教病院 倉敷中央病院 ノルウェー（ベルゲン）
5期生（2018年）		
6期生（2019年）		
7期生（2020年）		

産婦人科のドクター評価

○XXXX 先生

臨床においては一つ一つの症例から深く学ぼうという姿勢が見受けられ、丁寧に診療されるため患者からの信頼も得られていた。日常生活では礼儀正しく、指導医や周囲のスタッフとのコミュニケーション能力に優れていた。教育に関心を持ち、学生や研修医に対して熱意のある指導を行っていた。

泌尿器科ドクター評価

○XXXX 先生

国内の大学卒業生と比較して特に難点はありません。国家試験を合格し、初期研修を２年間行っており、知識や基本的技量はしっかりとしています。診療に対する熱意も十分にあります。英語力が非常に高いので、外国人患者の診療も十分にこなせると思われます。

消化器外科のドクター評価

○XXXXX 先生

消化管外科（3ヶ月）と肝胆膵外科（1ヶ月）の研修において、積極的に手術に参加し、手技の向上と解剖学的知識の習得に努めていた。術前術後カンファレンスでも、精力的にプレゼンテーションを行い、また病棟管理にも熱心に取り組み、患者の病態把握に努めていた。

○XXXX 先生

消化管外科（3ヶ月）の研修において、積極的に手術に参加し、手技の向上と解剖学的知識の習得に努めていた。術前術後カンファレンスでも、精力的にプレゼンテーションを行っていた。コミュニケーション能力も高く、チーム内や患者との関係も良好であった。

総合内科医からの評価

○XXXX 先生

積極的な姿勢で研修ローテーションに取り組んでいます。リーダーシップも発揮し、同期レジデントの取りまとめ役としても活躍しています。臨床研修に加え、大学院生として総合内科学に所属し、精力的に臨床研究を進めています。今後の活躍が大いに期待されます。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

一般財団法人ハンガリー医科大学事務局　組織紹介

理事長
川田 志明
■慶應大学名誉教授　■山中湖クリニック理事長
■元東海大学医学部教授

専務理事
石倉 秀哉
■米国非営利教育財団SAF日本代表
■公益財団法人海外医学生支援協会評議員
■医学生支援協会理事長

理事
岩尾 總一郎
■慶應大学医学部客員教授　■元厚生労働省医政局長
■元国際医療福祉大学副学長　■元 WHO健康開発総合研究センター長

理事
ユディット・フェンドラー
■セゲド大学理事長

理事
フェレンツ・ガイヤッシュ
■ペーチ大学生化学・医化学教授、
医学部英語プログラムディレクター

理事
松川 昭博
■岡山大学医学部病理学教授、元副医学部長

理事
アッティラ・ヤナイ
■デブレツェン大学生物物理学・細胞生物学教授、
医学部英語プログラムディレクター

理事
ヨゼフ・シャンドール
■センメルワイス大学医学部外科教授
■日・ハンガリー外科学会ハンガリー会長

評議員
ゾルタン・カラディ
■ペーチ大学医学部教授、生理学部長

評議員
藤元 勇一郎
■藤元メディカルシステム理事長
■社会福祉法人 常緑会 理事長
■社会福祉法人 星空の都 理事長

評議員
宇田 理夫
■元教育新聞社専務取締役

監事
中村 昌典
■弁護士
■京都大学卒

顧問
木曽 功
■元文部科学省国際統括官
■元ユネスコ全権大使

顧問
黒川 清
■東京大学名誉教授
■政策大学院大学名誉教授
■元 UCLA医学部教授

2020.05

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

一般財団法人チェコ医科大学事務局 組織紹介

理事長：石倉 秀哉
- 公益財団法人海外医学生支援協会評議員
- 医学生支援協会理事長

理事：岩尾 總一郎
- 慶應大学医学部客員教授
- 元国際医療福祉大学副学長
- 元厚生労働省医政局長
- 元 WHO 健康開発総合研究センター長

理事：奈良 信雄
- 東京医科歯科大学医学部特命教授
- 順天堂大学医学部特命教授
- 一般社団法人日本医学教育評価機構常任理事

理事：イジー・マイエル
- マサリク大学医学部内科部長
- 元マサリク大学医学部長

評議員：レベッカ・並木
- 元 JASA ディレクター

評議員：黒須 顕
- 元 UCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）麻酔学教授
- 元 Tokyo Midtown Clinic 副院長
- プライマリーケア東京クリニック院長

評議員：宇田 理夫
- 元教育新聞社専務取締役

監事：中村 昌典
- 弁護士
- 京都大学卒

顧問：木曽 功
- 元文部科学省国際統括官
- 元ユネスコ特命全権大使

2019.12

Czech Medical Universities
Czech Medical Universities Foundation

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.